

1. テキスト

「六 力と意志との媒介としての内的知覚」（59 頁後ろから 3 行目から 63 頁後ろから 4 行目まで）

2. テキスト要約

「四」で個物が、「五」でその中にある時間空間が「意志の自覚」から説明されたのを受けて、「六」では物理的空間を関係せしめ、物理的世界を構成するものも「意志の自覚」に求める他はないのではないかと述べ、まず意志によって「力の世界」が成立することを「内的知覚」によって説明しようとする。「内的知覚」ないし「内部知覚」はブレンターノ、マイノングの用語であるが、西田はこれを「純粹経験」と重ね合わせて考えていると見てよいであろう。『働くものから見るものへ』の第一論文「直接与えられるもの」における「直接与えられるもの」がほぼ「純粹経験」「直接経験」に相当しており、その「直接与えられるもの」が「意志の内部知覚」であるとしている（序旧全集 4 頁）ことからこのことはいえるであろう。ただ「意志の内部知覚」とあるように、『善の研究』の時期と決定的に違うところは内部知覚（純粹経験）の根柢に意志ないし自覚を見ている点である。

テキストでは「内部知覚」と「自覚」の違いが数学と物理、夢と実在の違いに重ねられ、自覚の立場において「夢と実在とを区別し得る」とされる。これを読む限り、純粹経験はそれに没入している間は夢を見ているようなものであり、それから醒めてそれを自覚することによって、純粹経験が純粹経験として実在となる、とも考えられる。それではどうして自覚によって実在であるということ言えるのか。

次のように言われる。

自覚に於ては終が始に含まれて居る、一つの発展が元に還ることによって、自覚の意識が成立するのである。（同 60～61 頁）

これは『善の研究』では「独立自全なる真実在の成立する方式」と言われたものに相当している。

先ず全体が含蓄的 implicit に現われる、それよりその内容が分化発展する、而してこの分化発展が終った時実在の全体が実現せられ完成せられるのである。（新文庫版 85～86 頁）

これによって確かに「終が始に含まれて居る」ことが説明できる。そうしてこの「実現せられ完成せられる」に「自覚」を読み取ることも可能であろう。しかし『善の研究』では「自覚」にまで言い及んでいない。

「自覚」の立場で上の一文を解釈するならば、「ロイスが挙げている英国にいて英国の完全なる地図をひく」例が適当であろう。完全なる地図が地図を描く自分までも描かねばならないとすれば、描くべきもの（「終」）は常に「始」に含まれている。描き終えることによって描く者は自らの姿を「自覚」するが、その時にはそこに「描き終えた自分」がいる。こうして無限に進むのである。テキストは次のように続く。

内的自覚というのも、かかる自覚の形に於て自己自身を知ることである。（旧全集 61 頁）

〈純粹経験（内的自覚）の自覚〉ということは『善の研究』では語られなかったことである。しかし純粹経験の中にはそれが「実在」であるとは言えず、それが言えるためにはその外に出て「自覚」しなければならない。「自覚の立場」はそうした要請にも応え得るものとなっている。テキストはさらに次のように続く。

併し自覚は単に閉じられた一つの円形ではなく、フィヒテの事行の如く無限なる進行である。（同）

「閉じられた一つの円形」とは「内的知覚」（純粹經驗）について言われたものと解すべきであろう。『善の研究』では目的的な円環が閉じられることによって、それが他の実在体系と衝突を起し、こうして無限に進行する、と考えられている。こうして例えば水を飲んだ後に、次なる欲求が生ずることになる。しかしその欲求が水を飲むこととどのような関係になるのかは分からない。水を飲むことは一つの目的的な円環として完結している。これに対し「自覚」の場合は自覚が直ちに次なる欲求を生むことになる。ここには必然性があると言える。

フィヒテの「事行 (Tathandlung)」とは「活動 (行) (Tat)」と「事実 (事) (Handlung)」が唯一同一とする思想であり、それが「自我はある」の表現である、とされる。即ち「自我」は単に事実としてあるのではなく、活動 (自己定立) によってあり、逆にこの「ある」によって「定立」がある、という思想である (『全知識学の基礎』 (1794-5))。この思想によって「自覚」と自己定立の無限進行が説明され得ると西田は考えている。そうしてここに西田は「唯一なる自己」の意識と「繰り返すことのできない『時』の形式」が考えられるとしている。

このように自己定立の無限進行の内に西田は「唯一の自己」を見る。しかしもし無限進行を出発点から合わせ鏡のように遡る仕方では考えれば、「唯一の自己」に辿り着くことはない。そこで西田は「自我=自我」を出発点に設定していると考え他はないのであるが、そのような設定を可能にしたものはおそらく「純粹經驗の立場」を導いた根本經驗であろう。

テキストでは「思惟と感覚とはこの立場に於て内面的に結合すると考えることができる」と続くが、「この立場」とは「自覚によって成立する内的知覚の立場」のことであろう。この立場において、純粹經驗の立場においてそうであったように、思惟と感覚が内面的に統一される。思惟は何らかの感覚内容を持ち、感覚もすでに思想を含んだものとなる。それは所謂「個人的」な表象でもなければ、いわゆる超個人的は概念でもない。

こうして「斯くの如くにして、内的知覚の立場に於て、事実に知識が成立するのである」とされるが、これは「純粹經驗の立場」において「純粹經驗が唯一の実在である」ことが成立すると言うに等しい。そうしてこの「内的知覚」の根柢に「意志の自覚」があるというのである。「純粹經驗の立場」は「自覚の立場」によって成立するということである。西田は「意志の自覚なくして、内的自覚はない」「意志の自覚の立場に於いて、我々は内的知覚の積極的内容を見る」と言う。

ついで西田は「自覚によって成立する内的知覚」即ち「事実の知識に客観性を与える内的知覚」が内に時間と空間を含んでいることをブレンターノの「時の様相」である「直視様相」と「斜視様相」との区別によって説明する。我々には次々に過ぎ去る音も、一つの音を聞いている自己を現在に知っているが故に、過ぎ去った音を現在において持っている、と言うのである。これが直視様相において斜視様相を表象している、ということである。

同様に直視様相によって一つの直線を見る時、その一点を中心にして、斜視様相によってその直線を左右に無限に延長することができるが、自覚の立場においてこれを対象化して閉じたものとして見るために、直線が無限遠点で会すると考えることもできるのである。

こうして「我々が作用の自覚の意識に於いて、内的知覚を超越し、之を内に包む時、時間と空間とを内に含む力の世界が成立する」と言われる。この「力の世界」の成立の論理は「個物」の成立の論理と同様である。

テキストでは自覚によって成立する「内的知覚の立場」（そこで空間時間が成立する）からさらに「自覚の立場」に進むことが、カントの「純粹悟性の原則の体系」（『純粹理性批判』B版）における「数学的原則」から「力学的原則」への進展に即して説明される。

「数学的原則」には①「直観の公理」と②「知覚の予料」とがある。①は「全ての直観は、外延量をもつ」、②は「全ての現象において、感覚の対象である実在的なものは、内包量つまり度をもつ」というものである。西田は「感覚は強度をもつ」が、これが「内的知覚自身の深き奥底」即ち「自覚」に入り込んで、經驗的内容の特殊性を超越した時に空間時間となる、それが内包量（度、「程度」）であるというように解釈する。

以上は「数学的原則」に関してであるが、さらに「内的知覚の立場」から「意志の自覚の立場」に超越すると、「力学的原則」の世界に入る。これには③「経験の類推」、④「経験的思惟一般の要請」とがある。③は「経験は、知覚の必然的な結合の表象によってのみ、可能である」ということであり、これには第一類推「現象のあらゆる交替において、実体は持続し、その量は、自然において、増加も減少もしない」、第二類推「あらゆる変化は、原因と結果の結合の法則に従って、起きる」、第三類推「全ての実体は、それが空間において同時に知覚され得るかぎり、首尾一貫した相互作用のうちにある」とがある。

④には3つの要請があり、第一要請は「(直観と概念に関する) 経験の形式的諸条件と一致するものは、可能である」、第二要請は「(感覚の) 経験の実質的諸条件と連関しているものは、現実的である」、第三要請は「現実的なものとの連関が、経験の普遍的諸条件に従って規定されているものは、必然的である(必然的に存在する)」となっている。

西田は「内的知覚の立場」から「意志の自覚の立場」に超越することによって「知覚の世界」から「経験の世界」に入るとしている。ここでもカントの立場を自らの自覚の立場によって説明しようという西田の意図が明瞭に読み取れる。

内的知覚は「無限なる内進」であり、その底にある「自覚」は「無限なる外進」である。それは「形なき形の限定として形を見る」如く、「反省することのできない作用の限定として反省せられた作用を見る」ということである。

「形なき所」「反省することのできない作用」、それは「反省の窮する所」に立ち現れる「無限の作用」である。「此立場に於て無限に内省的なる自己が成立し得る」。これが『善の研究』第3編から第4編の移行に際して読者が経験する根本経験であり、それによって「純粹経験の立場」が成立するのである。それはある意味でどこまでも直観の立場であり、「内省的」である。「而してかかる内省的自己の成立する所がいつでも現在であり、その背後に我々の意志が働いて居るのである」。純粹経験の背後には常に「意志」が働き、その自覚として「純粹経験」が成立しているということである。

3. 考察(哲学的問い)

純粹経験も反省されなければそれが「唯一実在である」ということが明らかにならないのは分かるとして、そのように反省せしめ、自覚せしめるものがここでも「意志」とされている。事実として「自覚」が成立しているならば、純粹経験から反省、自覚への超出は意志による外ない、ということであろう。しかしそこには他者、しかも他者として対象化できない「絶対的他者」に突如呼び起こされる、という契機があるのではなからうか。

(佐野記)